

今後の委託プロジェクト研究に係るブロック提案会（北海道ブロック）26.7.11 概要版

（１）生産現場の研究開発に対するニーズについて

（小林）

- 資材高騰、収益向上のところで現場で良く思うが、もう少し正確なデータがほしい。土壌の中をもう少しきちんと計れるような技術革新ができるようであれば活用できると思う。作物に不足している分が何かということが正確にデータに出てくるようになれば良い。
- 家畜糞尿の方でバイオガスをやっているが、消化液の量がたくさんあり大変になりつつある。この消化液を上手く処理できる方法の技術革新ができれば良い。
- 6次産業化をやっていこうとしている方は、製品を作りながら、その上販売ともなると、なかなかできる方は少ない。販売と製造が上手くできれば6次産業化ももう少しやりやすくなる。

（小野）

- 水稲の直播栽培の確立を是非ともお願いしたい。現在の水稲農家は60代から70代が半数以上を占めており、数年後にはリタイアされる状況が目に見えている。現状の水田確保を見ると10町歩から15町歩であるが倍になることは必須な状況。現在の栽培方式である育苗・耕起・代かき・植え付けの形では家族経営で20haが限界だろう。そうなると残り10haは直播栽培で取り組まないと農地の維持ができない。
- 直播栽培は、先ず問題点として収量の不安定さがあり技術的な確立をお願いしたい。毎年、直播を続けると雑草が繁茂するという状況があり、1年ごとに作付けほ場を変える状況にあるが、なかなか困難であり雑草を含めた技術確立をお願いしたい。
- 直播栽培は水のかけひきが大事な技術であり、用水の確保・排水対策はほ場を選ぶことからほ場の整備も緊急な課題。

（津島）

- ゆめちからの栽培をしているが、出口の方は売り先が無く困っている。価格が下がって生産意欲も下がっている。作る側と出口の方をきちんとマッチングして上手くやる部分が大切だと思っている。
- 輸出や6次産業化は非常にハードルが高い内容であり、自給率のない中で輸出して良いものと悪いもの、取り組んで良いもの悪いもの、取り組んで良い人と取り組むべきでない人があるのではないかと思うので、上手く整理しながら進めていただき

たい。

(新田)

- 小麦や大豆の個々の収量を最大にすることは個々の研究者にとっては大事なことであるが、経営全体の中で収量・収益を最大化させていくことを、これまでは技術の寄せ集めの中で実施してきたが、情報というものを接着剤として経営の中でやっていく方策が今後求められる。
- いろいろなセンシング技術、あるいはロボットなどがあるが、土の中はなかなか見えない。輪作や耕畜連携の中で、分析できない生物機能を高めて肥料の中で上手く使っていく視点が必要ではないか。
- 北海道は食料自給率200%と重要な供給基地になっているが、米1トン取りや小麦1トン取りにより250%や300%になった時に北海道農業はどうなるかというイメージを共有するような研究のスタイルもあっても良い。

(安孫子)

- 進む方向としては個性のあるニーズに対応することを目指すべきではないか。大量生産をすればするほど輸入品との価格や品質との果てしない競争に陥り、生産者としては耐えられない水準に陥ってしまう。
- 消費者が国産への認識が広まっていくと需要が増えていくが、今度はどうやって供給していくかという問題がある。簡単には解決できない問題ではあるが、特にパン用に関してはもう少し地道にマーケットを広げていく必要がある。
- 研究開発の部分では、安定して取れるという部分は要素。備蓄の問題も含めてどうやって安定供給していくのかについては、技術的な問題と思っている。
- 大規模化だけで進んでいくと輸入品との競争になる。価格と連動させる話になり生産性が不安定になる。そうではなく一定の価格帯で個性のあるニーズにあった品種を育てていくことが大事ではないか。特に麦の世界では輸入と国産があり、国産のあり方をきちっと位置付けないとまずい。

(石川)

- 良い品種や良い技術がどんどん出てくるが、最高のパフォーマンスを出すためにまだまだインフラ整備は必要。
- 収量性を高めても販売の方でズレがあると農業者だけでは収益性の確保はできないので、一体化しながら研究開発が進められると良い。
- 輸出において、コスト低減しなければ国際競争の価格の面ではかなり厳しいと考えられるので、コスト低減に向けた技術開発が必要。
- 少子化で人口が減る中での農村システムについて、所得があっても小さな町は人が

いなくなると学校などが無くなるなど、地域システムが崩れてくるという大きな問題になってくると思われるので、農村システムの研究も是非お願いしたい。

- 技術を現場に普及させていくためには農業改良普及指導員、研究、生産現場の農業者の方々が三位一体となりながらやっていかなければならない。

(李家)

- 日本全体を見回しても、人口減少、高齢化の問題、米の消費量の減少があり、水稻の面積を維持していくためには飼料用米への取組は早急に始めていかなければならない。飼料用米の品種はあるが非常に晩生で直播ができないものしかないため、飼料米の品種開発が急がれる。
- 水稻農家は1戸の面積が大きくなることが求められ、これらをクリアする技術が必要になり、直播を中心として技術開発が必要になってくるのではないかと。

(西村)

- 北海道の酪農についてはだいたい年間200戸程度ずつ減少傾向にあり、しっかり戸数を確保しながら基盤を強化していくことが必要。
- 粗飼料を中心として飼養管理は今後も豊富な草資源を活用していくことは必要ではないかと思料。粗飼料でどこまで生産できて生産力を確保できるのかを含めて検討してほしい。
- 畜産についても営農システムというものを確保していったって、ある年代になっても生産が続けられる環境がこれから求められるのではないかと。TMRセンターも哺育システムも同様で、このようなものを活用しながら経済的にはどうなのか、技術的にはどうなのかということと一緒に研究として進めていけば現場で活用できるのではないかと。

<全体を通してのご意見・ご講評等>

(小関)

- 農業の技術開発は社会実装を進めていくことが一番肝心。農業に先端技術を応用していくという中味を作っていただきたい。

(新田)

- 例えば、計量法の関係で土壌分析のデータが出せない、数値が伝わりにくいことがあって、現場では指導上困っているということも聞くので、元になる現場のデータが生かされるような研究をお願いしたい。

(八戸)

- 技術研究を進めても担い手の農業者がいないといった危機感がある。人数が減っても省力化の技術、誰でも関わっていける軽作業化の技術、そういったものを最優先に進めるべきではないか。
- 完璧な成果はなかなか無いが、もう少し磨けばというものもあり、農業者とともに農業現場で仕上げる仕組み・システムをプロジェクト研究の検討の中で考えていただきたい。
- 多くの課題提案を聞いたが単独では困難と思われるものが大半であり、どういう研究勢力とやった方がよいかを併せて聞いた方が理解しやすかった。